

# 進化社会学におけるエージェンシー - 構造問題

日本女子大学 三原武司

## 【1. 目的】

この報告の目的は、進化社会学におけるエージェンシーと構造の関係について類型化し、比較検討することを目的としている。進化社会学の領域では、近年の生命科学を参照しているにもかかわらず、エージェンシーと構造ないしミクロとマクロの関係について、さまざまな類型が確認されはじめている。そこで、この分野における主要論者の研究を紹介し、それを社会理論的に類型化することにより、比較検討する。

## 【2. 方法】

進化社会学におけるエージェンシー - 構造問題の事例として、ジョナサン・ターナーとマウリツィオ・メローニの研究をとりあげる。双方を類型化する社会理論として、アンソニー・ギデンズの構造化理論（構造の二重性）とマーガレット・アーチャーの形態生成論（分析的二元論）をもちいる。

## 【3. 結果】

ターナーは、人類進化を「個体主義的で自由なヒト」と「拘束をもたらす檻としての社会」という二元論で説明した。アーチャーも自由と拘束という二元論からホモ・サピエンスとしての存在を理論に措定している。ターナーの理論構成とアーチャーの分析的二元論は前提を共有していることから、双方は親和的であるとみられる。他方、メローニは、ヒトを「向 - 社会的存在」として把握し、ニッチ構築理論などに言及する。ニッチ構築理論は、「自然環境によって選択された生物の行動」と「生物の行動がもたらすニッチ構築によって変更された自然環境の選択圧」という双方向のかつ循環的な枠組みをもつ。これはギデンズの構造の二重性と前提を共有しており、構造化理論と親和的である。また、バイオソーシャル領域における構造化理論の応用研究では、分析的二元論が事実上もちこまれたかたちになる事例も確認された。

## 【4. 結論】

進化社会学の領域では、従来対立していると考えられていた構造の二重性と分析的二元論が、分析対象や目的によって使い分けられ、あるいは共存している状況にあることがわかった。ミクロとマクロの関係において、前者は同時生起的であり、後者は分離継起的である。前者は、エージェンシーの生活習慣がもたらす環境の形成と変容やエピジェネティック変異などに応用されている。後者は、人類史的な社会変動やエピジェネティック変異の世代的継承に応用されている。バイオソーシャル領域における応用によって理論的前提が変更されたため、双方の理論の相違点よりもむしろ類似性が浮上している状況にあると考えられる。

## 【文献】

Meloni, Maurizio, 2014, "How Biology Became Social, and What It Means for Social Theory," *The Sociological Review*, 62(3): 593-614.

三原武司, 2019, 「社会学 - 生命科学学際領域におけるミクロ - マクロ・リンク——〈エージェンシー - 構造〉問題の二重性と二元論」『現代社会学理論研究』13: 58-69.

Turner, Jonathan H. and Alexandra Maryanski, [2008] 2016, *On the Origin of Societies by Natural Selection*, New York: Routledge. (正岡寛司訳, 2017, 『自然選択による人間社会の起源』学文社.)